4　悠久の歴史ロマン、結城家の黄金（茨城県・栃木県）

「傍聴人、メモは取らないように！」

黒衣の裁判官の鋭い声が法廷に響いた。それが誰に向かって発せられたかは、わかりきっている。二、三十人分の座席がある傍聴席に陣取っているのはぼくだけで、しかも、声の主の真正面にいるのだから。

いまは一般の傍聴人が法廷内でメモを取ったりスケッチをしたりできるが、一九八七（昭和六十二）年当時はまだ許されていなかった。そんな閉鎖的なところとはつゆ知らず、ぼくは係争中の民事事件の内容をひとことも

聞きもらすまいと、念のために手帳に書きとめていたところだった。「なぜですか」と、食ってかかりたい気持ちをおさえて、ぼくはしぶしぶ手帳を引っこめた。なにしろ、裁判所の中に入るのは二十五年ぶりのこと。中学生のとき、社会科の校外学習で熊本地方裁判所の法廷を見学して以来で、もちろん、東京地方裁判所に入るのは初めてだった。

適当な理由をつけて勤務先を抜け出し、ただ一人の傍聴人になったわけは、こともあろうに、埋蔵金探しの仲間である仲元虎斎氏が被告人になっていたからだ。同年一月に始まった審理は二、三カ月おきに開かれ、このと

き四回目を迎えていた。原告は、東京都内にある「未来開発株式会社」の代表取締役Y氏。訴訟の内容はいうまでもなく埋蔵金探しに絡むもので、Y氏の主張を手短に述べると、仲元氏の口車に乗って大金をつぎ込み発掘をやったが、財宝が見つからなかったから、これは詐欺に等しい。損害を賠償してほしいというのだ。実にばかげている。

また、裁判を傍聴していて初めて知ったのだが、未来開発という会社は、不動産の売買で得た四億三千万円を元手に設立されている。登記した業務内容は地質調査と金属の回収。つまり、埋蔵金探しこそが目的なのである。

これはまちがいなく、日本初お目見えの会社だ。
（そんな会社が成り立つものなの？）
誰だってそう考えることだろう。ぼくでさえ、初めは（ウッソー）と思った。アメリカあたりには、プロといわれる人たちがいる。フロリダ半島だけでも、沈没船のサルベージを専門にしている会社が二十社近くあり、中には、時価十億ドルもの財宝の引き揚げに成功した人もいる。でも、それはごくまれな例で、いくらあの海域の難破船の資料が豊富で、信頼できる記録が多いといっても、みんなが成功するわけではない。何度も失敗を繰り返している連中のほうが多いのだ。ましてや、確実な話

など一つもないこの日本で、埋蔵金探しが事業として成り立つはずがない。カネをつぎ込んで、少なくとも元は取る、うまくいけば数倍、数十倍の利益が得られるといった資本主義社会における事業の論理は、この世界ではけっして通用しない。おろかにも、Y氏がそこのところに気づかなかったために、この世にも奇妙な裁判沙汰が起こったのである。

その前年の一月早々、仲元氏は九年ぶりに栃木県河内郡南河内町（現在の下野市）本吉田に舞い戻ってきた。生涯のターゲットと心に決めた、結城晴朝の財宝の探索を再開するためだ。伝説の詳細は後回しにするが、十二

世紀末から十六世紀末にかけての四百年間にわたり、関東きっての名門として北総（下総北部）一帯を治めてきた結城氏には、時価にして数千億から数兆といわれる金の延べ棒、砂金などの莫大な財宝があり、それを、のっぴきならない事情から、どこかに隠してしまったというのだ。

この話は根も葉もないものではない。その証拠に、十七世紀初頭から今日に至るまで、およそ四百年にわたり、徳川家康をはじめ、大岡越前守忠相（ただすけ）、大正初めの貴族院議員水野直（ただし）など、有名無名を問わず実にさまざまな人物が、現在の茨城県と栃木県にまたがる旧結城領の各

地に探索史を刻んできた。中でも、晴朝の隠居所だったと伝えられる本吉田の会之田城（別名的場城）の跡は、昔から絶対的本命といわれ、多くの人が入れ替わり立ち替わり発掘を行ってきた。

日本には数千、いや、もしかしたら万に達するかもしれないほどの埋蔵金伝説があるが、そのほとんどは話だけで、本気で探してみようという気にさせられるものは、そう多くはない。いまでは、古文書などの原資料はほとんど手に入らないから、伝説の信憑性を探っていくときに、探索史のほうからアプローチしていくのが、ぼくのような新参者のトレジャーハンターにとっては、手っ取

り早い方法といえる。つまり、これまで、その財宝探しに本気で取り組んだ人間がどれだけいるか、また、彼らがどのような根拠でやったかを調べることだ。古い話になればなるほど、探索史のほうも伝説化してしまっている場合があるが、少なくともおおもとの伝説よりは手がかりが多い。

マニアの間で日本三大埋蔵金といわれるものは、その意味においても群を抜いていて、世間を騒がせた華々しい探索史があると同時に、二十一世紀に入って数年を経た当時も、これをターゲットとして動いている個人またはグループが、それぞれ複数存在した。三大埋蔵金とは、

すなわち、徳川幕府御用金、太閤秀吉の黄金、そしてこの結城晴朝の財宝である。

さて、九年ぶり三回目の発掘を前に、仲元氏はY氏と手を組んだ。Y氏は、同じ場所をほんとうは単独で掘りたかったのだが、地主のI氏は、仲元氏以外の人間にはまったく取り合わなかった。事前に補償金を支払い、後始末もきちんとすることで、仲元氏はI氏の信頼を得ていたのだ。そこで、Y氏はしかたなく、共同で発掘をやる話を持ちかけてきたのだった。

仲元氏は、それまで足かけ二十年にわたって、結城の探索に打ち込んでいた。一九六七（昭和四十二）年から

始めた最初の発掘のときには、Ｉ家の敷地の半分以上をブルドーザで掘り起こした。かつては築山だったと思われる盛り土がすっかりなくなってしまい、その跡に広い栗林をつくることができるほどだったが、成果はなし。続いて昭和四十五年、地下に古井戸のようなものを発見し、その六年後に畠山清行氏の口添えで発掘を再開したことは前にも述べた。

「あと一歩のところじゃったんだがな」

と、仲元氏はしきりに悔しがっていた。砂利と砂の層を約五メートル掘り下げたとき、木と石で組まれた地下の宝庫らしいものを発見したというのだ。およそ一・五

メートル四方のその枠の側面に隙間があり、仲元氏がそこから中をのぞくと、カメのようなものが見えた。あとは枠を壊して中の物を取り出せばよい。

しかし、ここはきわめて地盤が悪く、冬場の渇水期でも五メートルも掘れば地下水が湧き出し、周りの土砂が崩れやすくなる。そこで、枠を取り囲むようにヒューム管を埋め込み、ポンプで排水しながら作業を進めようということになった。ところが、ここで仲間うちでのトラブルが起き、それに追い打ちをかけるように、もういっぽうの地主のY家からクレームがついた。これ以上掘られると家が傾いてしまうので、やめてくれというのであ

る。やむなく、仲元氏は発掘の中止を決断した。もし財宝が出てきても、このままの状態だったら、もっと大きなトラブルに進展する恐れがあったからだ。

宝庫らしいものを発見した現場は、I・Y両家のちょうど境界付近だった。以前は生け垣だったが、埋め戻されたあとしばらくして、そこに立派な大谷石の塀が築かれた。ぼくが仲元氏に頼まれて、東北本線小金井駅前の旅館に預けてあった排水ポンプを回収に行ったとき、ついでに現場の様子をのぞいてそのことを報告すると、仲元氏は、

「もうゼッタイに掘らせないぞという意志表示だな」

と、ため息をついた。ところが、それでも仲元氏の執念は衰えなかった。群馬県永井での二年にわたる発掘を経て、次の年には、ぼくのグループといっしょに猿ヶ京の十二神社の脇を掘り、さらに、愛知県の某所で神社の境内を夜中に盗み掘りする。それらがことごとく失敗に終わり、彼にとっては国内での埋蔵金探しの原点というべき土地に立ち戻ったのだった。

二十年の歳月といい、発掘に一億円近くもの費用をつぎ込んだことといい、仲元氏の執念は常人にはちょっと理解できないと思うが、執念もさることながら、それだけの資金力があったからできたのだ。造船が好況のとき

には、発掘費用を捻出するのはさほど難しいことではなく、事業が思わしくなくなってからも、個人的に出資してくれる人が数人いた。だから、資金的には見ず知らずの人間の力を借りる必要などまったくなかった。

その仲元氏が、なぜ他人と組む気になったのかというと、Y氏が、地下の様子を探る新しい器械、微重力測定器（マイクロ・グラビティ・メーター）による探査を提案したからである。仲元氏は、台湾で金塊を見つけるのに役立った電気探知機を使ってきたが、ここでは威力が発揮できなかった。大昔は鬼怒川の支流の河床だったところだから、一メートル以上掘ると砂と砂利ばかりにな

り、地下水の水位も高い。水分が電流に影響を与えて、埋もれた黄金をキャッチするのを妨げている可能性があった。

ところが、微重力測定器は、地盤の硬軟、あるいは水分の多少にかかわらず、数十メートルの深さまでの地下構造を探ることができるという。ほんとうなら画期的な器械だ。一定の距離をおいた地上の多数のポイントから、地球の中心に向かって重力を測定すると、測定値に微妙な差異が出てくる。地下に空間があれば数値は低く、逆に金属など質量の大きいものがあれば高くなる。

ちょうど同じころ、フランス人の建築家が、エジプト

のクフ王のピラミッドに未知の部屋があることを明らかにしたのもこの器械で、そのあとを受けて、早稲田大学古代エジプト調査室の吉村作治先生が調査を行ったこともよく知られている。だから、仲元氏がこれにとびついたのも無理はない。

いずれにしろ、Y氏にしてみれば、仲元氏のパートナーという形でしか、この場所の発掘に関わることはできなかったわけだし、仲元氏も、捲土重来を期する挑戦に、この新しい器械を導入することを大きな魅力と感じていた。つまり、二人が手を組んだまでは、客観的に見れば何の問題もなかったのである。

ぼくが仲元氏に呼ばれて、小金井駅前の旅館に顔を出したのは、測定器による探査が終わった直後だった。そのとき初めて会ったY氏は、探査資料を得意げに見せてくれた。一メートル四方ほどの大きな紙で、一千坪以上あるI家と隣のY家の平面図の中のおよそ百カ所に、細かい数字が書きこまれていた。平均値は百前後だったと思う。二けたの部分もあったし、他と比較して明らかに高い数値がかたまっている場所もあった。この図面によって三カ所に狙いが絞られた。

発掘はそれから間もない一月中旬に開始。ぼくは、新しい仲間を二人連れて現場に乗り込んだ。このころ、天

草以来の仲間は転勤で東京を離れていたり、この世界から足を洗ったりしていたので、子どもを対象に野外活動の指導をしている、若くて体力もある水島君と山口君を誘った。ただ、ぼくを含む三人は手伝いで、中心になって穴掘りを進めたのは専門の井戸掘り業者だった。

狙った場所は、Ｉ家の庭先の、かつて大岡越前が掘ったと思われるところの近くで、二日後には深さ三メートルに達したが、結局、金塊が顔を出すよりも業者がギブアップするのが先だった。一メートル以下は砂利と砂ばかりで、地下水もにじみ出す。素掘りでは三メートル掘り下げるのが精一杯。仲元氏もＹ氏も、自分では掘らな

いので、業者がもう掘れないといえば諦めるしかない。

ぼくたちが引き揚げたあと、仲元氏は山口へ帰り、Y氏は場所を変えて、結城市小田林（おだばやし）の金光寺（きんこうじ）の境内を掘っている。晴朝が建てたというこの寺も、以前から怪しいといわれていたところだ。それが二月のことで、三月にはまた本吉田に舞い戻り、どう話をつけたか、図面に×印のついていたY家の敷地内で、重機を入れて大がかりな発掘を行った。

もし、めでたく金を掘り当てていたなら、いうまでもなく、こんな裁判沙汰にはならなかったはず。しかし、失敗に終わったことで、ゴタゴタが起きてしまった。

過去に埋蔵金をネタにした詐欺事件は何件か起きていると聞く。つまり、他人にありもしない財宝の発掘話をもちかけて資金を出させ、掘りはしないでその金で豪遊したり、ドロンしたりという輩がいるのである。

ところが、本件はそういった詐欺事件とはまったく異質のものだった。なぜならば、ウソをついて掘らせたところで、仲元氏には何のメリットもないし、第一、その舞台である結城晴朝の隠居所跡に、山のような金の延べ棒が埋まっていると、ほかの誰よりも信じているのが仲元氏自身なのだから。

組んだ相手が悪かったとしかいいようがない。ぼくは、

人を外見だけで判断しないことにしているから、Y氏との初対面のときにもさほど悪い印象はもっておらず、むしろ同好の士として接し始めた。でも、すぐにどうもアブナイ人だなと思うようになった。外見についてはあえて書かないが、それよりも、縁が崩れ始めた穴の中にいる井戸掘り業者の頭の上で、いかにも上等そうな背広のポケットから取り出した、分厚い一万円札の束をパタパタさせながら、

「カネに糸目はつけない。金(きん)は絶対にあるんだから、じゃんじゃん掘ってくれ」

などとはっぱをかけるなんて、まともな人間がやるこ

とではない。また、手を握り合った同志なら、同じところに宿泊して策を練ったり相談したりするのが当然だと思うのだが、Y氏と連れの男性は、仲元氏が二十年来定宿にしていた小金井駅前の安い旅館には泊まらず、小山市の高いホテルを利用していた。夜は派手に遊び回っていたらしい。

「とにかく、カネ使いの荒い連中じゃ」

と、仲元氏がぼやいていたことを思い出す。

Y氏は雄弁な若手の弁護士を雇って裁判に臨んでいたが、仲元氏のほうはいつも一人。耳が遠いので、裁判官の言葉がよく聞き取れず、ときどきちんぷんかんぷんな

答えをしていた。

原告側は、すべての費用は二者が折半、発見した財宝も折半という条件で、事前に話し合いをつけるべく誠意を尽くしたと主張した。そのような内容の契約書が作られ、被告に郵送されたのは事実である。ところが、仲元氏の周囲の人たちが、この契約書を取り交わすことに反対したため、宙ぶらりんになっていて、正式な契約は成立していない。原告はそれを逆手にとって、被告は最初から誠意がなかったと非難した。

仲元氏の周囲が反対した理由は、ぼくも知っている。二十年間も莫大な資金を投じてひとりでやってきたの

に、突然脇から現れた得体の知れない人間に、半分もかっさらわれたのでは割に合わないからだ。

また、Y氏が一月から三月まで、発掘のために千八百万円もつぎ込んだのは事実だとしても、資金が使われた過程に問題があるのは、誰の目にも明らかだった。千八百万円のうち、七百三十万円は土地の所有者に対して支払った地代、いうなれば迷惑料。事後、Y氏は仲元氏の知らないうちに地主と交渉して、これを全額取り戻している。だから、残りの一千万ちょっとをどうにかしろというわけなのだが、被告は、自分の知らないところで勝手にカネを使っていたのだから、そんなものに責任

は負えないと反論した。三回に分けて行われた発掘のうち、仲元氏が直接参加したのは一月中旬の最初のときだけで、二回目と三回目は、Y氏が単独で行っている。そのとき、資金の使途についての相談はいっさいしていない。

もう一つ、この裁判で争点になっていたのが伝説の真偽である。原告のいい分はこうだ。

「ほんとうはありもしないのに、被告は絶対あるといってだました。数年前の発掘の際に現れたという木と石の枠組みの写真を見せられ、地下の宝庫だと説明されたが、その場所では探査機が何の反応も示さなかったからウソ

だろう」

確かに、微重力測定器による探査では、仲元氏のいう場所に明らかに何かが埋まっているという数値は出ていなかった。ぼくはとうとうその証拠写真を見る機会がなかったので、まったく判断がつかないが、いずれにしても、仲元氏がだますつもりでY氏にそれを見せたとは考えられない。ぼくには、

「室(むろ)の大きさからして、カメは八個ある。一つに四キロから五キロの延べ棒が十本入っているとすると、合計八十本はある勘定になる」

と、自信満々に言っていたし、裁判中も発言が認めら

れると、
「埋蔵金は必ずある。一週間あれば出してみせますよ」
と繰り返した。金塊を掘り出してみせれば、すべてかたがつくという考えで、できることならすぐにでも独自で発掘したいのだが、このゴタゴタで地主のＩ氏が消極的になっていた。これ以上の騒ぎは勘弁してくれという雰囲気なのだ。
考えてみれば、これは前代未聞の裁判である。担当の若い裁判官は、八十近くになってもなお夢を追い続ける老人を相手に、とまどいを隠しきれないでいた。同様に、原告の埋蔵金発掘会社に対しても、奇異の目を向けて接

していたのは確かだ。まさか、ことの収拾のために、裁判所が自ら埋蔵金の発掘を行うことを考えたはずもないが、そのときは、このまま審理が進むとなると、伝説の真偽について裁判所が何らかの見解を出す必要に迫られるような気がした。

四百年間にわたり、さまざまな人物によって探索が続けられてきたものの、いまだに白黒の決着がついていないこの伝説の謎を、もしかしたら天下の司法を取り扱う裁判所が解き明かしてくれるかもしれないと、ぼくは心の片隅で期待したものだ。

二百数十年前に、大岡越前守忠相がここを掘っている。

享保（きょうほう）の改革のとき、幕府の財政立て直しの事業の一環として、結城家埋蔵金の探索を行ったらしいのだ。結果は失敗に終わり、かの大岡裁きも埋蔵金には通じなかった。忠相に成り代わって、現代の裁判官がいったいどんな裁きを見せてくれるか興味津々だったが、実際には、裁判官は両者に和解を勧めるべく、妥協点を模索していただけだった。

さて、数多くの人々の欲望をかき立て、このような前代未聞の裁判沙汰まで引き起こした結城晴朝の埋蔵金とは、いったいどんな由来をもつものなのだろうか。

結城家の始祖は小山七郎朝光（ともみつ）で、源頼朝が伊豆で平氏追討の兵をあげた一一八〇（治承四）年に十四歳で元服し、翌年結城城主となった。小山氏は、「天慶（てんぎょう）の乱」で平将門（まさかど）を討伐して鎮守府将軍になった藤原秀郷（ひでさと）（俵藤太（たわらとうた））の後裔で、代々小山と結城の城を守り続けてきた名家である。朝光は頼朝に従い、平氏追討のために西下して活躍し、奥州藤原氏の討伐のときも先陣を務めて頼朝の信頼を得た。そして、その功績によって、栄華を極めた藤原氏の財宝のほとんどを恩賞として受け取ったといわれる。

鎌倉幕府が、その創始期から中期までのできごとを編

纂した歴史書『吾妻鏡』にも、藤原氏のもとには、紺瑠璃の笏、金の沓、王幡、金の花蔓、金鶴、銀猫、瑠璃の灯炉、南延白、金器、牛玉、犀角、象牙笛、水牛角などの財宝があったと書かれている。どんなものだったかは文字から想像するしかないが、こういった美術工芸品をはじめ、金の延べ棒、砂金の入った樽を持ち帰ったらしい。

それが事実なら、かつては黄金文化を誇ったといわれる奥州平泉に、現存する金がほんのわずかしかないことの説明がつく。国宝金色堂にしても、マルコ・ポーロが『東方見聞録』の中で語っている「厚さ四センチの金の

板を敷き詰めたジパングの宮殿」にはほど遠く、実際に使われているのは三万枚あまりの金箔で、総重量はおよそ十五キロ。ほかに、金泥と銀泥で一行おきに書かれた『紺紙金銀字交書一切経』（中尊寺経ともいう）や、初代清衡の棺に入っていた大粒の自然金（砂金）などがあるが、量的にはたいしたことはない。

では、往時のようすはどうだったか。記録によると、三代にわたって造営された中尊寺の大伽藍は、寺塔四十余宇、禅坊三百余宇もあり、「皆金色」、つまり建物も仏像も仏具も、すべて黄金色に輝いていたという。また、中尊寺経のもととなる一切経を、十万一千両の砂金（約

一・五トン）で大陸から買い求めたそうだから、藤原氏が蓄えた砂金は想像を絶する量だった。たとえその大半が地上極楽をめざす造営事業に費やされたとしても、藤原氏が支配した砂金の産地が、気仙川や北上川流域をはじめ、奥州のかなり広い範囲におよんでいたことを考えると、残されたものも相当あったにちがいない。

ただ、ときの権力者である源頼朝が、そのような莫大な財宝のすべてを、なぜあっさりと結城朝光に与えてしまったのかと、疑問をもつ人がいるかもしれないので、その答えを述べておこう。

一つは、二人が単なる主従の関係ではなかったからだ。

朝光の母が頼朝の乳母だった縁から、頼朝は朝光の元服の際に烏帽子親となり、実の弟のようにかわいがっていたといわれる。頼朝の実子説もあるくらいで、いずれにしろ特別な関係だった。さらには、奥州藤原氏と藤原秀郷が同系統の藤原北家（ほっけ）の出ということもあり、頼朝が、「平泉の黄金は朝光が受け継ぐべきである」と考えたのだとも伝えられている。

もう一つ、これはぼくの考えだが、頼朝が金に執着する必要がなかったからである。当時の日本では、まだ金は経済のうえでさほど重要な位置を占めていなかった。経済活動そのものが、いまとは比較にならないほどの規

模だったのだ。そのことは、古いタイプの財宝伝説からも推察できる。

全国各地に残る長者伝説には財宝伝説がつきもので、貧しくとも正直で働き者で親孝行の男が、ひょんなことから大金持ちになり、子孫のために財産を隠したという一定のパターンで語り継がれてきた。そして、そのありかは「朝日さし、夕日輝く○○の木の下に、黄金千杯、朱万杯」といった里歌のようなものに秘められている。朱の代わりに漆が出てきたり、黄金、朱、漆の三点セットだったりする。

つまり、黄金が貴重なものだったことはまちがいない

が、朱や漆と同等、あるいはそれ以上としても、装飾材料としての役割のほうが大きかった。金が経済の表舞台に登場するのは、室町時代中期以降。鉄砲が伝来した十六世紀の半ばから、ようやく通貨の主役の座に躍り出る。戦国武将が武力を高めるために、金銀が必要になってきたからだ。

鎌倉時代はどうだったかというと、政治力の基盤となる主従関係は「御恩と奉公」で成り立っていた。そして、主から従へもたらされる利益である「御恩」とはすなわち領地安堵であり、カネではなかったのだ。

高校のときの日本史の教科書にも、鎌倉政権は質素を

重んじたと書かれていた。暗記する必要などまったくないコラムに「鎌倉武士は味噌を肴に酒を飲んだ」とあり、なぜかいたく感動した記憶がある。たぶん頼朝自身がハデで贅沢な暮らしに興味がなく、その性向が政権そのものに反映したのだろう。義経を疎んじた理由も、いろいろあったかもしれないが、彼が都の色に染まったことに嫌悪感を抱いたこともその一つにちがいない。いずれにしても、金ピカの器物や延べ棒などを持っていても仕方がない。それらを朝光に与えることを、頼朝は少しも惜しいとは思わなかったはずだ。

そのようなわけで、朝光は莫大な財宝を手に入れた。

加えて、結城氏の領地だった北総一帯は、当時全国有数の穀倉地帯。この地を四百年にわたって治めてきたことから、実際の禄高が十八万石だったにもかかわらず、人々は「結城百万石」と、その富裕を讃えたという。

ところが、戦国時代末期の一五九〇（天正十八）年のこと。豊臣秀吉が関東の雄、小田原の北条氏を攻めた際に、結城家に波紋が及ぶ。同家の当主、第十七代の晴朝は、秀吉を支援するため、いち早く小田原に駆けつけると、秀吉は心強く思い、上機嫌で晴朝に接した。そのとき晴朝は六十歳になっていたが、世継ぎがなかった。たった一人の実子が三十年も前に病死していたのだ。それを

知った秀吉は、羽柴秀康（はしばひでやす）を養子として与えようと言いだす。秀康は徳川家康の次男で、小牧・長久手の戦いののち、人質として秀吉のもとに送られ、その養子となっていた。

晴朝は、秀康が若いのになかなか優れた人物だという評判は聞いていたものの、この話を素直に喜ぶことができなかった。なぜならば、晴朝は秀康の実父である家康が嫌いだったからだ。性格的に合わなかったのだろう。とはいえ、秀吉からのこの養子縁組みの話は、半ば命令に近かったから、晴朝も断わるわけにはいかない。しぶしぶおすすめに従うしかなかった。

やがて秀吉が死に、家康が権力を握る。秀康に結城家第十八代の家督を譲り、隠居していた晴朝だったが、しだいに身の不安を感じ始めていた。

（家康は結城家の財宝に目をつけている。必ず何らかの手段で、これを没収しようとするだろう）

事実、家康は、力のある外様大名や少しでも自分の意にそぐわない言動のある者に対し、いろいろと理由をつけては、とりつぶしや国替えを行っていた。実子秀康に対しても、一時的にしろ豊臣に籍をおいたことを不快に思ってか、いつも冷淡だったから、彼を盾にすることはできそうもなかった。

晴朝の不安は、関ヶ原の戦の直後に現実のものとなる。秀康の関ヶ原での功績を理由に、越前その他六十七万石への転封を命じられたのだ。十八万石から一挙に六十七万石だから、表向きは約四倍増の大栄転だが、家康の狙いははっきりしていた。

（先祖伝来の財宝を家康ごときに渡してなるものか）

晴朝はこのとき、財宝の埋蔵を計画したのである。

秀康はただちに北庄（きたのしょう）（福井）へ向かったが、晴朝は隠居所としていた結城郊外の会之田城にひきこもったまま、出発の引き延ばしをはかった。先祖代々の遺品の整理に時間がかかるからとか、越前の冬の寒さは老人の身

にはこたえるからとか、あるいは先祖の霊をまつる御廟（みたまや）をつくるからなどと、いろいろ理由を並べたてて居座り、追い立てられるように福井へ向かったのは、転封の命令が下ってから一年以上もあとのことだった。その間に、おそらく財宝の埋蔵工事が行われたのだろう。夜になると、決まって会之田の館の周りに、明かりがちらちらしていたという言い伝えがある。

その後、秀康は松平に復姓したが、一六〇七（慶長十二）年に三十四歳の若さで病没。そしてその三年後、晴朝が八十三歳の高齢でこの世を去る。旧結城領は、一七〇〇（元禄十三）年までのちょうど百年間は幕府の

天領になっていた。代官所は別に建てられ、城は廃城となった。

では、金の延べ棒、砂金などの財宝は、いったいどこに隠されたのだろう。城跡か、晴朝の隠居所跡か、あるいは代々の霊をまつった御廟か、それとも家臣の膳所（ぜぜ）主水が書き残したと伝えられる古文書にあった、鬼怒川河畔の小塙（こばな）か。そのすべての場所でこれまで発掘が行われているが、何かが出てきたためしがない。

探索は埋蔵が行われたと思われる一六〇一（慶長六）年の直後から始まっている。最初に手をつけたのは、ほかでもない徳川家康である。家康は晴朝の死後、福井城

の金蔵をあらためたが、思っていたほどの財宝はなかった。そこで、やはり晴朝は旧領地のどこかに隠したにちがいないと考え、膳所主水を捕らえて拷問にかけ、「古井戸」という言葉を聞き出したという。家康は、秀康転封後廃城となっていた結城城内のすべての古井戸を調べさせたが、何も出てこなかった。

発掘に失敗した家康は、その記録を残すとともに、北総一帯に埋蔵金発掘禁止令を出している。記録が現存しないので、ほんとうかどうかは疑問だが、ある文書によると、「士分タル者結城晴朝ノ埋蔵金ニ猥リニ関係スルニ於テハ家断絶タルベシ」という内容だったらしい。事

実だとしたら、晴朝が財宝を埋蔵したという話は広く流布していたから、この発掘は幕府が行うということを強くアピールしておきたかったのだろう。

二度目の発掘が行われたのは、家康の死後百年以上たった一七三七（元文二）年のことで、八代将軍吉宗の時代だった。いわゆる「享保の改革」をおしすすめていた吉宗は、当時寺社奉行兼関東地方御用掛だった大岡越前守忠相に、結城の財宝の発掘を命じたのである。改革の主目的は、財政の立て直しだった。台所が苦しくなった幕府としては、のどから手が出るほど金がほしかったにちがいない。金銀を中心に据えた流通貨幣の問題は、

常に幕府を悩ませていたからだ。

少しさかのぼると、五代将軍綱吉の時代には、元禄小判など金の品位を落とした貨幣が発行され、そのため流通経済は活気を呈したものの、インフレを招いた。その打開策として、六代家宣（いえのぶ）は宝永小判を鋳造させた。この小判はインチキくさいもので、品位は慶長小判と同じ八十パーセント強だが、重さのほうは慶長小判の約十八グラムに対して、九グラムと半分しかなく、金の量も元禄小判を下回っていた。そのため、世間一般では宝永小判への引き換えが嫌われた。その後「正徳の治」で、新井白石は慶長への完全復帰策を進言し、ほぼ慶長小判と

同質の正徳小判がつくられ、次の享保小判へと受け継がれる。しかし、良質の小判は退蔵、つまりタンスの奥にしまい込まれてしまうことが多く、一転してデフレ現象が起こり、流通経済に支障をきたした。吉宗が八代将軍に就任したころは、大名や幕府の財政が逼迫（ひっぱく）するという、徳川幕藩体制の危機を迎えていたのである。

吉宗が鋳造させた元文小判は、金の量が享保小判の半分に近いという粗悪なもので、これを旧貨幣と同一価格で引き換えさせるという乱暴な政策をとったが、結果的には物価が安定し、江戸時代に何度か行われた貨幣改鋳の中で、もっとも成功した例であると、後世になって評

価されている。

ところが、吉宗はこの改鋳には反対だったらしい。それを押し切って実施したのが、大岡忠相だった。この史実は結城の発掘とどう結びつくのか、興味深いところだ。前後関係を明確にすれば、元文小判の鋳造を始めたのが一七三六（元文元）年で、発掘を行ったのは翌年のこと。

忠相が掘ったのは、晴朝の隠居所だった会之田城跡である。三月に始まった発掘は、成果がないまま梅雨に入った。何度も述べたように、このあたりはかつて鬼怒川の支流の河床だったところなので、一メートルも掘ると砂利と砂ばかりになる。そのうえ水が出やすいから作業は

非常にやりにくい。梅雨ということもあって、地下水の水位が上がったため、掘った穴が崩れ、なんと十一人の死者が出るという騒ぎになった。

結局、このために発掘は中止され、忠相は目的を果たすことができなかった。犠牲者を供養する祠が、いまでもＩ家の

江戸時代に半ばに大岡忠相が掘った場所には犠牲者を弔う祠が残っている。

庭先に建っている。

その後、一七八二（天明二）年にもう一度幕府による発掘が実施されたが、成果はなく、ずっと後の一九一七（大正六）年、元禄時代から結城城主となった水野家最後の藩主の子で、貴族院議員だった水野直子爵が、米相場師の熊倉良助氏と組んで大々的な発掘を行っている。

また、昭和初期には、片岡吾市という人物が、やはり会之田城跡に狙いをつけて探索を行っているが、いずれも収穫はゼロだった。

さて、例の裁判は、結局、裁判官の勧告に従ってお

よそ半年後に和解が成立した。仲元氏がＹ氏に対して五百万円を支払うことになったのだ。どうみても仲元氏側の敗訴だから、ぼくとしては納得がいかなかったが、本人がもう面倒はいやだというのでしかたがない。この老トレジャーハンターにとって何よりも優先すべきは、地主を説得して次の発掘のチャンスを得ることだった。

Ｙ氏とはカネで話し合いがついて縁が切れたから、もうゴタゴタは起こさないというのが、地主に対する説得材料だったようで、年号が変わって間もない一九八九（平成元）年早々にそのときがやってきた。ぼくもまた呼ばれて、東北本線小金井駅前の旅館に行ったのだが、仲元

氏一人と思いきや、またもや意外な人物が加わっていたので驚いた。

福島県いわき市のK氏で、前に一度だけだが、本人からの電話を受けたことがあった。この人も、摩訶不思議なダウジングの使い手なのだ。道具は手作りで、しかも部品の中に放射性物質を組み込んでいるという。試してみないかという誘いを、ぼくはそのとききっぱり断った。この種の道具は詐欺に利用されることが多く、実際、被害にあった人が大勢いることを畠山氏からも聞いていたからだ。それが、どこでどうつながったか、仲元氏はK氏と組むことになったのである。

（ひとこと相談してくれればいいのに）

そう思ったが、仲元氏は事を最初から最後まで自分の判断で進めるのが主義だから、口出しはしないことにした。もっとも、ぼくにも、K氏の道具をちょっと見ておきたいという下心があったし、どっちもどっちなのだけれども。

それにしても、このハイテク時代に、なぜ地下数メートルの貴金属のありかがわかる探知機がないのだろうか。ハイテクの中でも、各種センサーの進歩はとくに著しく、たとえば、人工衛星を使ったリモートセンシングという技術がある。衛星は地上のあらゆるデータを人間

の目よりも精確に送ってくれる。本物の芝生と人工芝のちがいを、衛星は判別することができるし、性能的に最も優れているといわれる軍事衛星は、水面下三百メートルの潜水艦をキャッチできる。地上のフォークとスプーンを見分けることさえできるという。チェルノブイリ原発事故の際、アメリカの軍事衛星は、爆発のもようはもちろんのこと、直前に作業員が運動場でバレーボールを楽しんでいたというデータまで送ってきているのだ。

それなのに、地下のようすを探るセンサーとなると信頼できるものがない。技術開発が立ち後れているのだろうか。いや、冷静に考えてみると、けっしてそういうわ

けではないはずだ。地中レーダーや電気探知機、微重力測定器のような各種の物理探査は、もともと宝探しのために開発されたのではなく、地盤調査とか大規模な遺跡・遺構を探し出すために作られたもの。埋蔵金は、よほど大がかりな工事をして大量に隠したものでない限り、あくまでピンポイントだから、ヒットさせるのは至難のわざだ。それに、基本に立ち戻って考えれば、これまでの現場は、初めから財宝などなかったところなのだろう。ほんとうに埋まっていれば、キャッチできたのかもしれない。

いずれにしろここでは、何種類かの探査技術を使って、

財宝をあぶり出せなかったのだから、少々怪しいものでも、仲元氏が頼ってみたくなる気持ちはよくわかる。

さて、K氏は初日に早速その道具を使って探査をやってくれた。まるで地鎮祭のような趣(おもむき)で、狙いを定めた栗林の一角に、まず五、六本の釣り竿のようなロッドが立てられた。長さは二メートルくらい。その間をせわしく歩き回りながら、K氏は手にした道具を振り回す。それまで、ぼくが目にしたダウジングの道具は、たいてい自然に動き始めるのをじっと待つ形のものだったが、K氏はまちがいなく意識的にそれを振り回している。ブンブンとうなりをあげるくらいに。三十センチほどの金属棒

の先に、十センチあるかどうかの鎖がつき、先端に長さ約二十センチの、まん中がややふくらんだ紡錘形の本体がついている。その中に放射性物質や電子部品が組み込んであるそうで、表面はほんとうかどうかわからないが、金箔と称するもので覆われていた。

地主のI氏と関係者以外に、敷地に入り込んでくる人はまったくいなかった。もし何も知らない人がこの光景を見たら、いったいどう思っただろう。K氏はそろそろ八十に手が届く年齢で、小柄で痩身。白髪を振り乱し、歳の割には素早い身動きで庭を歩き回っている。固唾を飲んでそれを見つめるのは四人の男たち。年齢はぼくが

いちばん若く（当時四十一歳）、あとは、K氏と仲元氏の間を取り持った人物をふくめ、七十を過ぎた老人ばかりだ。

やがて、K氏は自信たっぷりに発掘のポイントを一カ所に絞り込んだ。そして、翌日に大型の重機を使った発掘が行われた。鋼鉄の爪のついた巨大なバケットが、まず数本の栗の木を根こそぎにすると、うなりをあげて土をえぐり始める。ここも、一メートルにも達しないうちに砂利ばかりとなり、やがて地下水が混じるようになった。

ものの数十分で深さが四、五メートルに達したころ、

突然、ズラリと並んだ厚い木の板が現れた。「おっ」という声が上がったが、仲元氏だけは落ち着いていた。

「熊倉じゃな」

大正年間に、米相場師の熊倉良助が、結城の旧藩主の子孫と組んで掘ったときの名残だ。当時は鋼矢板がなかったので、ヤマ止め用にこのような木の板を使ったのだ。外側に竹の箍(たが)がはめられているから、まるで地中に大きな酒樽か醤油樽が埋められているような格好である。

(ということは、ここもすでに終わったところなんだ)

初めから期待はしていなかったものの、この現実を見

せつけられれば、そう思うしかない。それでも、バケットアームが届く限り動き続け、むなしく砂利と水をすくい上げるのを、みんなといっしょにしばらくは眺め続けていた。

重機のオペレーターが限界を告げたとき、仲元氏が重々しく作業の終了を宣言した。ありとあらゆる方法を駆使し、二十二年間も燃やし続けてきた、結城晴朝の黄金発見にかける執念の炎が、ついに消えた。

二回目の発掘のときに見つかった、木と石でできた地下の宝庫らしいものは、隣家のY家の強い反対があって、もう確かめることはできないし、I家でも、三歳か四歳

の孫が、深い穴が口をあけた現場近くをちょろちょろ走り回って危ないから、「これきりにしてほしい」と強硬に言うようになった。

八方ふさがり。残念ながら、それが仲元氏の目の前に突きつけられた抗いようのない現実だった。

「延べ棒一本でも出てくれば気がすむんだが」

ぼそっとつぶやいた仲元氏の横顔が、ぼくの網膜に焼きついている。一億円もつぎこんだのは、数万本の延べ棒が手に入るとふんだからなのに、たった一本でいいとは。ここまで来ると、欲なんてどこかへ消え失せ、残ったのは意地だけだったのだろう。

支援者も多かったようだが、きっとあざけった連中もいたはず。自分を納得させるだけでなく、そういう人たちに、「ほうら、このとおりあったではないか」と、延べ棒を見せつけてやりたかったにちがいない。

ぼくは慰めの言葉を探したが、そんなものはどこにも転がっていなかった。といっても、仲元氏を哀れに思ったわけではない。終始、彼の発掘に悲壮感というものは感じられなかった。本人がしばしば口にしていたように、これは「道楽」以外の何ものでもなかったからだ。実に鮮やかな引き際をぼくは見た。

以後、ぼくは仲元氏と直接顔を合わせることはなかっ

た。ようやく普通のご隠居さんの暮らしに戻り、奥さんや娘さんもさぞかしほっとしたことだろうと、勝手に想像していたのだが、実はそうではなかった。結城の財宝には完全にギブアップしたものの、次なるターゲットを求めて、それからも何回か上京していたのだ。行き先は、畠山清行氏が入院していた病院。

そのころ、畠山氏は体調を崩して入退院を繰り返していたが、枕元で有力な情報を聞き出し、今度は武田家の軍用金を求めて山梨県の方に通っていたのだった。

ところが、場所を特定して地主との交渉を進めていた矢先の一九九一（平成三）年春、畠山氏がとうとう亡く

なった。さらに、八十二歳になっていた仲元氏自身も胃潰瘍で吐血し、八カ月近く入院することに。病院から何度かぼくへ電話がかかってきて、元気になったら山梨を掘るから、手伝いに来てほしいと頼まれた。

もともと声が大きいので、電話の様子ではまだまだいじょうぶだろうと思っていたのだが、そのうち、「医者がまだ出してくれん」とぼやきが混じるようになり、ついには「何度も上京できそうにないので、地主との交渉を代行してもらえないだろうか」という依頼に変わった。

そこで、場所と地主の名前をきいて出かけていったの

だが、かなりガードが固く、一筋縄ではいきそうになかった。

「話がついたら、病院を抜け出して駆けつけるから。もうこれが、人生最後の発掘になるだろう。死に花を咲かせてみせようじゃないか」

という意義込みもむなしく、仲元氏は九四年の五月、帰らぬ人となった。ぼくの留守中に、娘さんから電話で知らせがあり、弔電は打ったものの、山口まで葬儀に出かけていくことはできなかったから、死に顔は見ていない。そのせいもあるのだろうか、仲元氏はいまもぼくの心の中で、日本を代表するトレジャーハンターとして生

き続けている。

ぼくが再び結城の財宝に関わる機会は、意外に早くやってきた。

東京都内に住む山田照子さん(仮名)から電話がかかってきたのは、一九九四(平成六)年春のこと。それまで、本人に直接会ったことはなかったが、名前はよく知っていた。トレジャーハンターの間で、彼女が結城の埋蔵金の謎を解いたらしいといううわさが広まっていたからだ。かの畠山清行氏からも、その話を聞いたことがある。また、「トレハンクラブ」の会員でもあると聞いていた。

「トレハンクラブ」というのは、アメリカ製金属探知機の販売代理店が音頭とりをしてつくったもので、当初は「日本トレジャー・ハンティング・クラブ」と称していた。ところが、まったく同じ名前の組織がすでに存在することに気づいたのだろう、いつのころからか略称を使うようになった。ぼくたちのクラブよりずっと多くの会員を集めているらしく、その中の数人から電話をもらったこともある。

その会員の中でも一目置かれる存在が山田さんで、ぼくは彼女がすでに謎解きの結果に基づき、どこかを掘ったものとばかり思っていたが、そうではなかった。長い

時間をかけて、一歩一歩慎重に裏付け調査を進めていたのだ。そして、ある程度の自信をもつことができた場所について、第三者の見解と、科学的な探査方法に関するアドバイスを求めるため、ぼくに連絡をしてきたのだった。畠山氏もついに聞き出すことができなかった謎解きの内容を知りたかったし、ぼくは二つ返事で訪問を約束し、数日後、東京都内にある自宅兼事務所を訪ねた。

彼女は一見、ぼくが抱いていたイメージとまったくちがう女性だった。息子さん夫婦も同居する三世代家族の要と想像される家庭人で、とても柔和な顔をした、孫思いの優しいおばあちゃんだった。それでも、同じ事務所

に机を並べて、ご主人の会社とは別の建設および不動産会社を切り盛りする実業家の顔ももちあわせていたから、けっこうやり手であるのはまちがいない。本人も言っていた。

「最近は仕事のほうは忙しくない程度にして、結城の埋蔵金に熱中していますけど、ひところは大きな不動産の取引でかけずり回っていたんですよ」

トレジャーハンターの世界に女性はけっして多くはない。ぼくが知る限りでは、主体性をもってやっている人は二人しかいない。なぜだろうか。そのわけを説明するのにかっこうな話を、ぼくはある機会に耳にしていた。

雑誌の取材で北海道の浜頓別（はまとんべつ）というところへ砂金採りに行ったとき、インストラクターの青年がこんな話をしてくれたのだ。

「ウソタンナイ砂金採掘公園」と名づけられた常設の砂金採り場には、夏休みともなるとファミリーの来訪者が多い。親子で川の中に入ると、初めはみんなでせっせと川底の砂をあさっているが、そのうちにまず子どもたちが飽きてきて、魚を追い回すほうに興味が移る。次に父親がくたびれて、岸辺に上がりビールを飲んだりたばこをふかし始めたりする。最後まで手を休めず、砂金採りだけに精を出すのは母親。そんなお決まりの光景が、

いつも目の前に展開されるらしい。
要するに、女性はものの考え方がより現実的で、目の前にある金には執着するが、埋蔵金のように、ほんとうにあるかどうかわからないものには、あまり手を出したがらない傾向があるのだろう。ぼくの周りにも、分け前をもらう話には熱心でも、現場までついて行きたいという女性はなかなかいない。
だから、山田さんはとても珍しいタイプの女性ということになる。第一に、歴史好きだということ。でも、つきあい始めてみると、いかにも女性らしい面が多分にあった。男性よりもはるかに慎重だし、恥をよく知って

いる。もっとも、恥知らずの男性トレジャーハンターが多すぎるので、その差が歴然としすぎるのかもしれないが。

山田さんの謎解きのポイントとなったのは、結城市小田林にある金光寺の山門に彫り込まれた三首の和歌である。それは、埋蔵金マニアの間で結城の財宝のありかを示唆するものといわれ続けてきた。この寺は結城晴朝が創建したと伝えられるが、いつごろからそんな話が広まったのかはぼくも知らない。仲元氏の手伝いで結城方面に通い始めてからは、ごく当たり前のようにこれに関心をもち、もちろん実物を見に行ったこともある。でも、

梁に浮き彫りにされた文字は、首を直角に曲げて仰ぎ見れば、はっきり読みとれるものの、意味をどう解釈したらいいのかさっぱりわからなかったし、財宝のありかを示していると考えるには、あまりにも関連性の薄い内容に思えて、疑問すら抱いていた。畠山氏も和歌

結城晴朝が創建したと伝えられる結城市小田林の金光寺山門

の解釈に関しては、はっきりした見解を述べてはいない。その和歌とは、次のようなものだ。

A　きの苧かふゆうもんにさくはなもみどりをのこす萬代乃たね

B　こふりやうにふれてからまるうつ若葉つゆのなごりはすへの世まで(きん)も

C　あやめさく水にうつろふかきつばたいろはかはらぬ花のかんばし

山田さんがこの和歌の存在を知ったのは、一九七四(昭

和四十九）年のことだった。それが、子どものころ耳にした「吉田の金掘り」の話と結びついたのだ。彼女の出身地は、結城市に隣接する下館市（現筑西市）。片岡吾市氏が本吉田（当時は吉田村）の会之田城跡を掘ったのが昭和十年ごろだから、そのうわさが近隣に伝わっていたのだろう。

「まさか、こんな有名な埋蔵金伝説に関係したものだったとは思いもよらなかったですよ」

山田さんは当時を懐かしんでそう言った。それからというもの、俄然、伝説に興味がわいてきて、謎解きに取りかかった。手始めに、古い和歌の研究で名高いある大

北東と北西の柱の間の梁に彫られたＣの和歌

学の先生のところへもっていったところ、たったひと言、「意味不明のヘタな歌だ」と言われたそうだ。それを聞いて彼女は、埋蔵金との関連を確信した。

（意味も分からないようなヘタな歌を、お寺の山門などに刻むはずがない）

まもなく、これがアナグラムの一種ではないかと気がついた。アナグラムとは、言葉や文字を並べかえて、元とまったくちがった意味の言葉や文にする遊びだ。一時期、週刊誌のクイズなどでもこれが流行っていたし、TVCMのギャグに取り入れられているのを見たこともある。

山田さんは歌の文字を全部ひらがなにしてバラし、それを組み合わせて意味のある言葉と文章を再構成しようとした。手がかりは埋蔵金伝説に関連する人物の名前や地名などだ。試行錯誤の毎日。そして、ついに謎が解けた。

「百点満点の正解というわけではないと思いますが」

遠慮がちな中にも半分得意気な表情を浮かべながら、彼女はぼくに解読の結果を明かしてくれた。AとBにはさほどのインパクトはなかったが、Cを見たとき、ぼくは思わず驚きの声を上げていた。

「えっ、ほんとに？」

三十一文字のうちのおよそ半分、十五文字を並べかえ

たその文章は、以前から注目されてきたある地名をズバリ示していたのである。すなわち、「たからはなかくきのしろにうつす」だ。「なかくきのしろ」が、寺から北北西に五百メートルほどのところにある中久喜城であることはまちがいない。

また、山門に彫られているのは和歌だけではない。ほかにも財宝の埋蔵に関連すると思われるいくつかの絵や文字がある。

正面には、胴体で二つの輪を作るヘビ。不思議なのは、ヘビの頭に耳がついていること。獣の頭に見える。ぼくは直感で犬と判断した。しかも、その先にモモの形をし

た宝珠が描かれていて、犬の頭をもつヘビが、宝珠（宝物の意味か？）を追いかけているような構図になっている。

さらに、屋根の下の東側にあたる妻壁の内側には、川の流れが曲線で刻まれ、その途中に岩が等間隔に四つ並んでいる。そのうちの一つから、上に向かって放

山門の前面の彫刻。犬の頭をもつヘビが宝珠を追う図

射状の直線が幾筋かのびている。まんがでピカピカと光り輝いているようすを表現するときに使う手法と同じだ。

あとは、四本の柱の上方に彫られた方角を表す文字。これがまたなんともややこしい。東北の柱から順に右回りに「うつしたとやら」「いたらつかみな午去右」「さるな」「い巳ぬか亥な」とあり、いずれも一字ずつ区切る波線がまるで装飾のように走っている。一字おきに読めということらしく、一部よけいなものや例外的なもの（そうではなくて、何か意味があるのかもしれない）があるが、うしとら（東北）、たつみ（東南）、さる（西南）、いぬ

亥（西北）と読むことができる。四本の柱は正確にその方角に位置するように建てられている。ぼくはそれらのすべてが、中久喜城のある北北西の方角を示していると考えた。

また、山田さんに同行して、ぼく自身としては三回目の金光寺訪問のときに初めて知ったのだが、この山門は寺の創建当時に造られたものではない。ちゃんと梁の一部に「弘化三丙午」と彫られていたのだ。弘化三年というと西暦一八四六年。幕末に近いころなのである。これは重大なことで、四百年も前に隠された財宝の手がかりが、なぜ二百四十年以上も後にこんな形で残されたのか、

当然ながら疑問がわいてくる。もともと同じような山門があり、老朽化して再建するときに、何もかもそっくりに造ったのだろうか。それとも、和歌や絵が文書で残されていたものを、当時の住職が山門に写しかえたのだろうか。

いずれにしても、埋蔵金探しの一つの醍醐味である謎解きを楽しむには、これ以上ないほどの素材だから、山田さんが熱中するのは無理もない。調べたことや推理によって導き出した場所について語るとき、彼女の表情は生き生きとしていた。しゃべり始めたら止まらない。一時間も二時間も、ぼくは聞き役に回らなければならな

かったが、それはけっして苦痛ではなかった。
以後何度か、ぼくは山田さんの結城詣でにつき合った。候補地をくまなく歩いて、推理の内容との整合性を確かめながらポイントを絞ることから始まり、あるときは地主さんの家を菓子折を手に訪ね、すでに聞き出していた畑の下の異状などを再確認したりした。それは同時に、本格的な調査をするときのための根回しの意味も含んでいた。そういった地元の人への気配りが、実に女性らしいと感じたものだ。
数回にわたって探査機も入れてみた。例の微重力測定器に地中レーダー。さらに、直径約二センチの鉄棒を負

荷をかけて地中深く差し込んでいく簡易ボーリングも試してみた。しかし、どこもはっきりした当たりは得られなかった。地中レーダーがわずかな地層の変化をとらえたときは、期待に胸が膨らんだが、念のために同じ場所を微重力測定器で調べてみると、重たいものが埋まっている様子はない。個々の探査システムの特性のちがいを考慮すれば、どちらにも同じ結果が出たときに初めてほんとうの当たりとなるわけだが、残念ながらその期待ははずれた。

あるとき、山田さんがせき込んだ声で電話をかけてきた。

「Yさんって知ってますか。中久喜を掘るんだそうですよ。私どうしましょう」

中久喜城の跡は彼女も本命視している。そしてYさんとは、ほかでもない、仲元氏と組んで発掘をやり、裁判沙汰まで引き起こした未来開発株式会社の社長である。まだ結城を諦めてはいなかったのだ。地元の人からの連絡で山田さんはそのことを知ったのだが、地主の許可をとり、迷惑料まで払っているというからやめさせるわけにもいかない。

ただ、掘るポイントはこちらの考えているところとは少しずれていたようなので、ハラハラしながらも知らせ

を待っていると、重機で一日掘っただけで何も出ず、引き揚げていったとのことだった。

後日、ぼくはY氏と直接会う機会があった。相手の目的は新しい情報を仕入れることで、大きなスイカ一個と、どこでどう許可をとって実施したか、大阪城内の探査データを手土産に、わが家の近くまでやってきた。そのとき、ぼくはやんわりと結城の発掘の話を持ち出してみたが、掘った場所はどうやら新種のダウジングが示した場所らしかった。そのダウジングを扱う人は、フィリピンの山下財宝探しを専門にやっている、ぼくもよく知っている人物だった。

Y氏はその後ようやく結城から遠ざかり、徳川幕府の御用金探しにシフトして、群馬へ通うようになった。以前からある場所の調査をやっていた人と組み、しばらくはそれに専念していたが、空っ風が吹く冬の寒い日に現場で高所から落下し、数カ月後に世を去ったと人づてに聞いた。四億円以上にのぼる宝探し会社の開業資金はすべて使い果たし、借金までしょいこんで、哀れな最期だったようだ。

Y氏の失敗の原因は、当初多額の資金があったことにほかならないと、ぼくは思う。いい加減な伝承やひとが書いた本などを鵜呑みにして、とにかくカネにまかせて

掘りさえすれば、どこかで当たると考えたのだろう。この世界は、そんな甘いものではない。

対照的に、山田さんは実に慎重である。いつでも本発掘ができるだけの十分な資金の用意はあるのに、石橋をたたいてもなかなか渡ろうとしない。「百パーセント確実でなければ、本発掘はしません」という考えなのだ。掘って何も出なかったら恥をかくという意識も強い。それも女性特有の感覚だろう。ぼくなんか、出なくて当たり前なのだから、条件さえととのえば気軽に掘ってみてもいいと思うのだが。

山田さんに初めて会ってからずいぶん時がたった。あ

るときから距離を置くようになったのは、二人の娘さんから交流を断つように申し入れがあったからだ。

「今度訪ねてきたら警察を呼びますよ」

とまで言われた。ぼくは向こうから求められて、アドバイスをしたり手伝ったりしていたのだが、カネ目当てで彼女につきまとう連中と一緒にされてしまったようだ。

ともかく、娘さんたちは母親が宝探しに熱中することを快く思っていないのだ。できればやめさせたいので、周りであおるような人間を排除したかった。もしかしたら、ぼくの知らないところで大金を使っていたのかもし

れない。

そんなわけで、その後も彼女が調査を続けたのかどうか、ぼくは知らない。健在だとしても相当な年齢になるはずだし、現地から何のうわさも伝わってこないところをみると、とうに見切りをつけたものと思われる。

結城の財宝に関連する夢を、ぼくが見ることはない。ポチの遠吠えも聞かない。長い間関わってはきたものの、誰かの手伝いばかりで、主体的ではなかったからだろう。それはこれからも変わらない。本命ポイントの見当はついているが、史跡として保護されている場所で、発掘許可をとるのは難しい。

それでも、四百年にもおよぶ日本最長の発掘史に終止符を打つ者の出現を願わずにはいられない。その反面、ルーツをたどれば八百年もさかのぼる、ロマンの香り豊かなこの有名伝説が、北関東の地にいつまでも語り継がれていくのも悪くないと思っている。

栃木・茨城の県境にあるのどかな田園地帯を水戸線の電車が走る。後方の森が中久喜城跡